

“竜の眼” —資料と短信—

ポーランドの民俗学協会
—その歴史と活動について—

クリスティナ・カミンスカ*

① ポーランドの民俗学協会の歴史

ポーランドの民俗学協会の歴史は、19世紀末まで遡り、ヨーロッパ全般に民族（俗）学という概念が生まれたのとはほぼ同時期にあたる。進化主義などととも、ポーランドで民間宗教・風習・魔法・禁忌など研究し始めた目的は、隣国による分割のため世界の地図の中から消されたポーランドの起源を思い返し、国の復活を目指すことにあった。ポーランドのいにしえに目を向けることは、当然かつてはなやかなりし頃の、自由に心身を傾けることと同じ意味だった。ポーランドの民俗学を形成することは、支配から免れられた古代スラブ人の遺産を保護するという目的であった。

そのようなヒューマニズムの思想を持って、民間にみられる俗信・信仰に関し重要性を指摘していたのは、当時の啓蒙主義の人文科学者 HUGO KOLLATAJ（フゴ・コロンタイ）であり、彼はポーランドの民俗（族）学の創始者とされている。1805年は、新しい研究分野を創るための準備が、内緒で WILNO（ビリニユス）大学で整えられた。1806年に行われた発表会において、民間でみられる原始的信仰などは、「文化的現象」—ファクター—と位置づけられた。それら匿名で投稿される記事は、民間伝承・民間治療方法・年中行事・人生儀礼・俗信・魔法の他に、広く原始宗教・スラブの神話などが主であった。その時期のものは、1887年にあらわれた WISLA（ビスワ川）という準専門雑誌に記載されている。

当時のポーランドは、3ヶ国（オーストリア・プロシア・ロシア）のもとで分割され支配されて

いたので、民俗（族）協会を創ろうとする発意は、支配する権力者側の強い抵抗にあったという。そういう状況の中で、LWOW（リボフ）大学の ANTONI KALINA（アヌトニ・カリナ）教授の努力によって、民俗学創立は推進された。その結果、1894年に LWOW で開かれたポーランドの文学者及びジャーナリストの集会のときに、KALINA が学会を組織し、1895年2月9日には学会規定の草稿を提出した。その後、民俗協会の会長は、10年間にわたって KALINA が任命されていた。そして学会の本部は LWOW に置かれた。

新しく創られた民俗協会（POLSKIE TOWARZYSTWO LUDOZNAWCZE, ポルスキエ・トバジストボ・ルッドヅナブチエ、その後に PTL に省略される）の活動目的は、ポーランドの国民・民衆（LUD, ルッド）（写真1）を研究することの他、ポーランドと隣接する国々の人達に、その研究結果を広く紹介することにあった。そのために、協会の活躍の最初の一年間に、会員から会費を募り、LUD という民俗雑誌（この1巻は1895

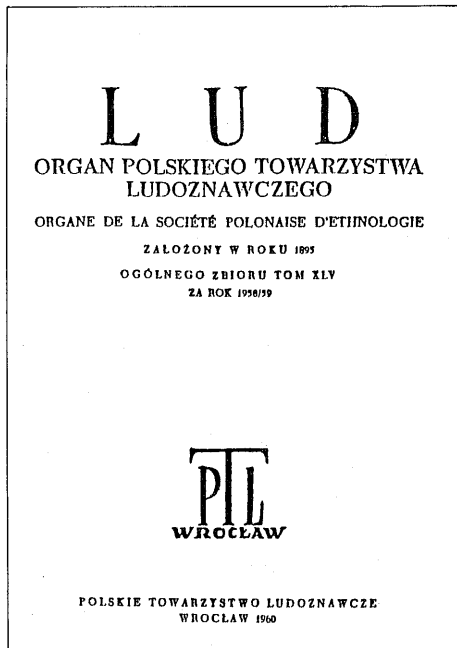


写真1 ポーランドの民俗雑誌 LUD

*筑波大学大学院歴史・人類学研究科

年に刊行されたため、ヨーロッパの一番古い民俗雑誌の一つとみられる)が出版された。また、研究資料をできるだけ多く、そして早く収集するためには、LWOW 本部の他に、民俗協会の地方支部が5ヶ所に設けられた。研究は、最も寛大な支配を行っていたオーストリアの支配地にある GALICJA (ガリチャ) 分割地で活発に行われたという。ここには800人もの会員がいて、協会から送られた指示、アンケートなどによって、調査を行い報告を出していた。また1年間で早くも、1000点以上の民具を集めた。これから民俗博物館を開館しようとする意図が明らかである。協会本部では、3ヶ月毎に定期的に発表会、研究会が開催され、その内容は LUD に掲載された。

民俗(族)は、民俗(族)学者に限らず、歴史学者、哲学者、宗教学者、言語学者などの興味を引きつけ、彼らの加入によって、民俗(族)学は学際的なアカデミックな分野と発展した。また外国の同様な活動を行っている民俗(族)協会と様々な交流を始めて、研究課題、研究過程と方法を話し合うようになった。そしてここでもう一つ挙げなければならない事実は、当時多くのポーランド人が、シベリアに流刑されたため、地方特派員のような形でそこの現地調査を行い、大量の重要な資料を研究のために供したという(写真2)。

ただし現在は、ポーランドのミンゾク研究テーマは往々物質(有形)文化、したがって社会文化の方に傾むき、民族学の優先的な性質をあらわし



写真2 民俗調査を行う B. Dekowska

ている。その一方、民俗学は精神文化しか扱わないために、その研究がむしろ低く評価され、ずいぶん遅れているという。または部分的に民族学の中に吸収されたという状態である。

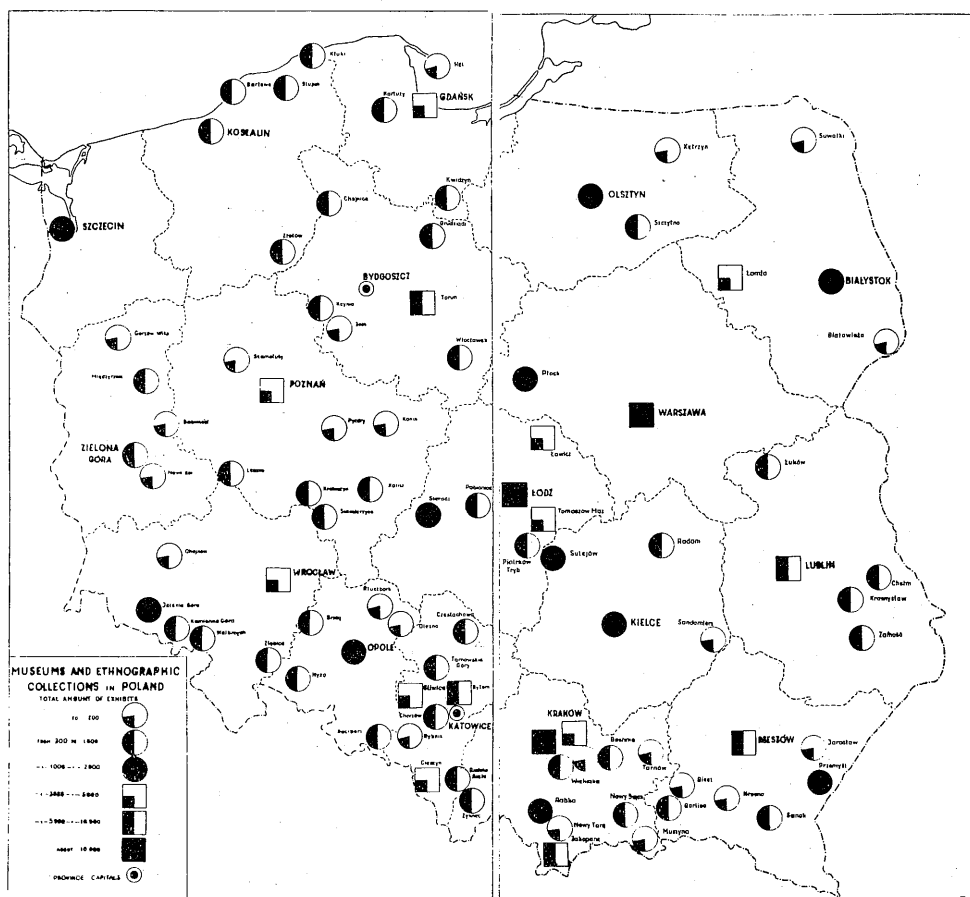
第一次世界大戦終了後、ポーランドの五つの大学では、民族(俗)学研究室が開講された。それによって、民俗協会の性質がずいぶん変わったらしく、民俗同好会的な組織からより整った形の民俗学協会・民俗学会に変遷してきた。ADAM FISCHER (アダム・フィシェル)、JAN CZEKANOWSKI (ヤン・チェカノフスキ)をはじめ、多くの気鋭の専門家があらわれ、若い研究者を教育し始めた。

1921年には、民俗学協会は、ワルシャワのポーランド民族学協会と密接な交流を行い、その結果、2番目の雑誌、民族学事業 (PRACE ETNOGRAFICZNE, プラチエ・エトノグラフィチネ) が出版された。

第二次世界大戦のため、民俗学協会は一時中止されたが、戦争が終った直後から改めてその活動を再開した。1945年11月22日は、協会は現在の名称に変更(その省略は PTL となっている)し、会長に CZEKANOWSKI を任命した。そのとき初めて、民俗学協会は全国的な機関と認知された。その本部は、1945-1951年の間は LUBLIN (ルブリン)、1952-1953年の間は POZNAN (ポズナニ) に位置していたが、1954年から WROCLAW (ブロッラフ) に移り、現在まで続いている(地図1)。

民俗学協会は、ポーランド科学アカデミーに属するものである。その目的は大きく言って、四つある。それは1. 調査に基づく研究事業、2. 民俗資料を刊行すること、3. 民俗文化を普及すること、4. 民俗遺跡を保護することである。

協会はおよそ2000人の会員を有し、彼らは全国の22の分会に所属している。協会の規定は、まず戦後1947年、そして最終的に1970年に決定された。その規定をみると、民俗学協会の最高部局は、WALNE ZGROMADZENIE DELEGATOW = WZD (バルネ・ヅゴロマジェニエ・デレガットフ) といい、全国からの代表委員会である。その会合は



Map 2. Museums and Ethnographic

Collections in Poland.

地図1 ポーランドの民俗博物館

毎年行われ、本部のメンバーを選ぶ。その任期は3年である。WZDのもとには地方分会が含まれている。会員になりたい場合は、2枚の申告書と、会員の推薦が必要となっている。会員は、協会の証明書をもらい、また毎年会費を払えば、WZDの年会に参加したり、PTL協会の出版物を25%割引で購入したりすることができる。

地方にある協会の支部では、その活動は広い範囲にわたり、実地調査研究をはじめ、地方的、また全国的なシンポジウム、発表会、研究会などを実施する。それぞれの支部の内部と外は、特定の

問題によって、セクションとクラブが臨時的にも催され、問題を解決し研究結果を報告するまで活動を続けていく。その活動にあたっては地方の文化的施設との交流を盛んに行っている。

1976年には、自文化をもっと知ろうとする一般愛好家も参画し、地方特派員セクションと名付けられた。彼らによって、専門家の定期的な調査によって聞き落とされたような、伝統的民俗文化を調べ報告書を本部に送るといった仕組みになっている。地元の古老が書いた伝記、日記などのものは、大切な資料とみられており、研究者がかいま見れ

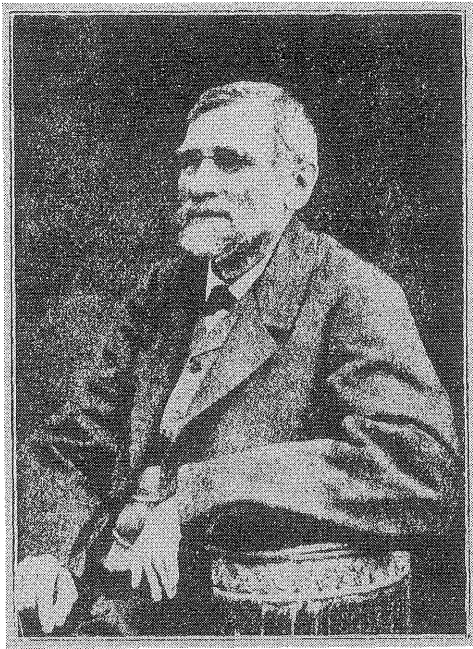


写真3 Oskarg Kolberg

ない所からの資料が提供された。特派員の便宜のために、LODZ (ルジ)の民俗(族)インフォメーション・センターが作られている。

最後に、簡単にポーランドの民俗の父と呼ばれる研究者を紹介しよう。それはOSKAR KOLBERG (オスカル・コルベルグ)である(写真3)。彼は1814年生まれ、1890年に他界するまでは、50年間にわたってポーランド全国、そして隣国からの、民間信仰とかかわる資料を収集した人である。その資料は、19世紀の終わり頃から20世紀の初頭の間、36巻に及ぶ定本として出版されたが、推測によれば未刊分をあわせると、全部で80巻になっているらしい(写真4)。そのため、前世紀の伝統、民間文化を語るものとしては、全ヨーロッパにおいて最も多くの記載のある資料といわれている。それぞれの一冊は、ポーランドの行政区分をはじめ、地理的景観的区分などによっている。特定の一帯の地域の特殊性がはっきり記述されているという。一冊毎に、昔話、伝説、民俗舞踊のテキストと曲、様々な儀礼儀式、祭司、行事など

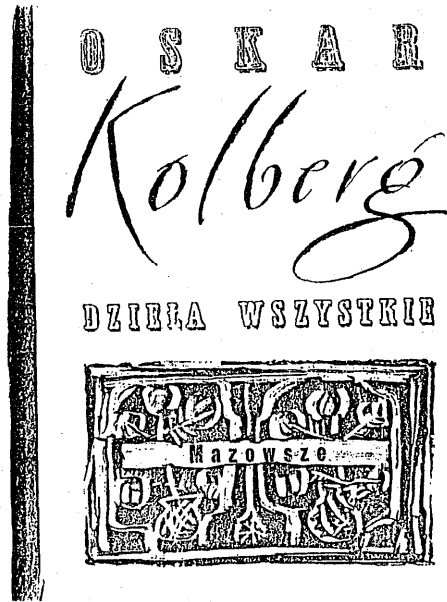


写真4 O. Kolberg 全集, 42巻

の説明や描写が数多く登場する。著者のスケッチなども載っている(写真5, 次頁参照)。

参考文献:

- Dzieje badan etnograficznych, Etnografia Słowianska, Adam Fischer 編, Książnica-Atlas, Lwow-Warszawa 1934
- Informacja o działalności Polskiego Towarzystwa Ludoznawczego, Wrocław 1983
- LUD 45, Polskie Towarzystwo Ludoznawcze, Wrocław 1960
- LUD 68, Polskie Towarzystwo Ludoznawcze, Wrocław 1984
- Oskar Kolberg, Dzieła Wszystkie 42, PTL Wrocław-Poznań 1970



1. Ryunek terenowy O. Kolberga (ubiór Andrzeja Jasłickiego ze wsi Biła Woda pow. Suwałki: suknianna biela koloru wulgi, czarne lub ciemnoniebieskie wypustki, pas ciemnoczerwony).

Handwritten musical notation with lyrics in Polish. The lyrics include:

*Spomnił się Anon, Adas a mój z miłkaniem od kół, od kół, od kół...
Pomógł mi pomógł mi a do kół, kół, a do kół...
a do kół, a do kół, a do kół...
a do kół, a do kół, a do kół...*

The musical notation consists of several staves with notes and rests. The text is written in a cursive hand.

9. Nętkopis O. Kolberga (z wyjątkiem pieśni od Alguszków, nr 1012, 1013, 1004, 1005).

写真5 O. Kolberg のスケッチ